

「ヤ行上一段活用」小史

遠藤佳那子

現行の学校文法では、古典語「射る・鑄る」は、ヤ行上一段活用とするのが一般的である。「射る・鑄る」は「い・い・いる・いる・いれ・いよ」と活用し、見かけ上はア行なのかヤ行なのか区別することができない。そのため古典文法を学ぶ生徒からは奇妙に思われるのが常である。

これについては、一般的に次のように解説されている。

ア行動詞がたいへん珍しいことと（「得」^{ヨリ}1語だけ）、（「見る」が「目」と関連するように）「射る」は「矢」と関連するのではないかと考えて、仮にヤ行としているのである。

（小田勝2015『実例詳解古典文法総覧』）

「弓」と「射る」を関連づける言説は、たとえば大槻文彦『言海』（1889-91）の「弓」の項目に、「ゆハ射ト通ズ、射ル物ノ意ト云」と見えるものである。また後の『大言海』（1932-35）には、「射る」を「遣るト通ズ」と説き、ヤ行との関連を示唆している。

『大言海』には、「沃る」「鑄る」を「射る」の関連語彙とする説も見える。「射る」の次に「沃る」を挙げ「前条ヨリ移レル語カ」とし、さらに「鑄る」を挙げて「沃る義」と説くのである。つまり、これらは全て「射る」から転じた同じ活用型の動詞ということになる。

「射る・鑄る」にまつわる言説は、さらに近世国学者に遡ることができる。

最初に「射る・鑄る」を「一段活用」としたのは、もとおりはるにわ本居宣長（1763-1828）である。学校文法の基礎を築いた一人で、活用表を作り、「一段活用」や「四段活用」「変格活用」などの術語を創案した。彼は当初、「射る」をア行の活用語だとし、「此一段の活は此行のいか〔や〕行のいか定めがたけれど、先しばらくここに出しあきつ」（『詞八衢』）と、ヤ行の可能性にも言及して保留している。この後、春庭は「射る・鑄る」をア行からヤ行に変更するが（『詞通路』）、その根拠はとくに明記されていない。

春庭の学説を受け、正式に「射る・鑄る」をヤ行上

一段活用に分類したのは、義門（1786-1843）である。義門は「連用」「連体」「已然」などの名付け親である。

義門は「射る・鑄る」をヤ行とした理由を、「ユメぢやのユミぢやのと云を、イメ、イミと云がもとならんと云ことあれば、それがユメ、ユミ、いづれもヤ行の音なれば」（『和語説略図聞書』）と説明している。「ユメ-イメ」「ユミ-イミ」の「イ」は、「ユ」がヤ行の中で母音交替したものと考え、同様に「射る・鑄る」の「イ」もまたヤ行の「イ」だとするのである。この義門の立場は、強い影響力をもって後の国学者に継承された。

一方で、なぜア行では都合が悪いのか。これについては、ア行を特別視する言説が背景にあると考えられる。中でも複数の国学者が唱えるのは、「ア行の音は言葉の中・下には付かない」という法則である。たとえば義門も、体言が複合するときに母音交替する例（「稻」^{イネ}が「稻穂」^{イナ}、「声」^{コエ}が「声色」^{コワ}となるような例）を紹介しつつ、「阿行のみには此例なし。さるは阿行の音はすべて言の下につかぬ音なればなり」（『山口山葉』）と述べる。つまり複合語の要素になると、語と語の接続部分で「ネ→ナ」「エ→ワ」のように母音交替する例は多いが、その中に「エ→ア」のようなア行の母音交替の例は無い、と主張しているのである。こうした指摘は、上代語において母音音節は語頭にしか立たず、母音連續が避けられていた、という法則を把握し、敷衍したものである。

この法則が「射る」についても適応される。

ユミイル カズイ
今の世にも弓射、又数射などいひ、源氏物語にも
まといとあるは的射にて、まとゐにあらざるよし、
ふるくよりいへば、言の下にいふい也、（中略）
阿行のいは言葉の下にいふことなき格なるを、右
のごとく弓いるなどいふは、阿行のいにあらざる
証なり、

（林匱雄『言葉の緒環』）

「的射」など複合語の用例がある、だがア行音は語頭にしか立たず語中・語末には置かれない、「的射」の「射」は語中・語末なのでア行の「イ」ではありえない、つまりヤ行の「イ」である。このような論理で、「射る」はヤ行上一段活用だと根拠づけられているのである。

こうして「射る・鋤る」は、ヤ行上一段活用であるとされてきた。ただし、国学者たちは「鋤る」を掲出するものの特に議論しておらず、なぜヤ行としたのか

根拠は不明である。これについては大槻文彦が補ったといえよう。

春庭や義門ら国学者が整えた文法学説は、大槻文彦によって西洋文典と折衷され、明治期の国語教育や学校文法の成立を支えてゆく。ただし、大槻文彦の著した文法書「語法指南」および『広日本文典』には、「射る」はア行上一段活用として掲載されており、なお疑問が残る点である。

(えんどうかなこ・日本文学科講師)